

信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果

プログラム名	グローバルエンジニア育成のための マラヤ大学工学部ラボラトリー研修プログラム		
学部・研究科名	工学部		
実施期間	2014年9月3日（水）～9月25日（木）		
研修先(国・都市・施設名)	マレーシア クアラルンプール マラヤ大学		
参加学生数	： 10名	知の森基金からの支援者	： 3名
プログラム概要	信州大学の学術協定校である、マレーシアのマラヤ大学に、工学部の学生10名を派遣した。 工学系の専門授業を英語で受講するという海外留学の疑似体験を行った。大学で実際に行われる英語での講義や実習、大学寮での生活等、約3週間の「留学シミュレーション」を通じて、マレーシアのみならず世界各国からの学生と交流し、今後の海外留学や進路について考え、また将来国際的に通用するエンジニアに成長するための課題や目標を見つけ出し、学業及び研究促進へのきっかけとなる研修となった。		

実施状況・成果

渡航前に3回の事前ガイダンスを開催した。研修の目的・目標設定、海外渡航に関する安全指導、マレーシアからの留学生の協力による、マレーシアについての勉強会、受講する予定の講義内容に関する予習及び英単語等の事前学習、日本を紹介するための素材作り等を行った。

3週間の短期留学期間は、マラヤ大学での授業や特別講義、学内施設の見学会等に参加した。新年度開始の時期であったため、海外からの留学生を対象としたオリエンテーションにも一緒に参加することができた。事前学習の成果もあり、それぞれが専門とする学科での授業は英語でも理解できることが実感できた一方で、専門以外の学科での英語の講義にはかなり苦労したようである。授業における積極性や真剣に学ぶ姿は、日本の大学しか知らない学生にとって、自らの学び方、学びに対する姿勢を再考する良いきっかけとなり、勉学に対するモチベーションを高めて帰国した。中長期の留学、大学院進学や大学院での留学を視野に入れるようになった学生もいる。

現地での学生生活においては、授業の休講、予定変更、寮生活でのトラブル等様々なことが発生したが、これらも自らの力で臨機応変に対応し解決することで、行動力の向上及び自信につながる経験となった。

異文化にじかに触れたことにより、多くの参加者が単に視野が広がっただけでなく、異文化や宗教、習慣や価値観の違いを理解する心が広がったと感じていること、さまざまコミュニケーションを通じて、違いだけでなく共通点を見出し、同じアジア人であるということを認識できたことは、今後、この研修に参加した学生が社会におけるグローバルな活動をするための土台となる大きな収穫であった。
帰国後は報告会を開催、参加者は各学科の学外特別講義の単位を取得した。また、次年度の研修説明会や、渡航前ガイダンスにも参加し、当研修に参加する後輩たちを支援していく予定である。

学生の声①ー工学部 学生

初めて接するマレー語は覚えて使ってみることが楽しく、やはり言語はコミュニケーションに欠かせないツールだということを改めて感じた。東南アジアの気候や寮生活、イスラム文化など初めてのことが多く、たくさんの刺激があった。その中でも寮生活は印象的で、早朝のコーランや水しか出ないシャワー、人間が死にそうな殺虫剤の散布や猫だらけの学食など、日本では体験できないことの連続で、人間的に強く豊かになったと思う。社会問題になっているイスラム教の派閥も、全てのムスリムが抱いているわけではなく、多くの人たちはお互いの考え方を尊重していると感じた。今回の研修を通じて、英語を使えるのは当たり前で、英語力や英語的思考力を身につけるために、日本人は本当に危機感を感じて学ばなければならないと考えると同時に、もっと日本の文化や技術を大切にし、発信する力を身につけるべきだと思った。

学生の声②ー工学部 学生

私は今回の研修において、さまざまな価値観に触れ、異文化交流を通じて自分の視野を広げることができたと思う。まず講義では、学生が積極的に授業に臨んでおり、教授の投げかける質問に対して自分の意見を論理的に述べていた。また、授業では教科書を使わず、内容も詳細部分については触れず大まかな枠組みをとらえるような構成になっており、授業後の学習を促すような配慮がされていると感じた。実際、図書館では多くの学生が自主学習に励んでおり、勤勉な学生の態度を見習う必要があると感じた。語学力に関して、出発前は英語を使うことに対して少し恥ずかしさのようなものもあり、発信力が欠けていた。研修中は英語しか意思伝達の手段がない状況下におかれることで、話すことに対する抵抗感はほぼなくなり、飛躍的に語学力が向上したと感じている。また、講義を通して専門科目における英語での表現などを学ぶことができた意義であった。
今後、国際的に活躍できる技術者を目指すため、この経験で学んだことを活かし、語学力の更なる向上に励むとともに、今後の研究活動に精力的に取り組み、日々研鑽を積んでいく所存である。

マレーシア クアラルンプール マラヤ大学にて

